

学び方や学習ツールを自由に選べる環境で、個別と協働を行き来して、学びを深める

神奈川県 横須賀市立長沢中学校

全校で「主体的・対話的で深い学び」を目指す授業研究に取り組む横須賀市立長沢中学校では、生徒一人ひとりが課題を設定し、自分に合う学び方や学習ツールを選ぶことができる「個別最適な学び」の実現に力を入れている。生徒が「教科リーダー」となって授業を進行するようになり、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を図ったりするなど、生徒が自ら学びに向かう授業づくりを行っている。



◎学校教育目標は「命一杯に生きる」。2019年度から取り組む校内研究では、生徒が主体性を発揮できる環境の整備などに注力している。それにより、生徒が自分たちで話し合って校則を見直すなど、主体的に問題解決をする力の育成につなげている。

開校 1985 (昭和 60) 年

校長 小番奈緒美先生

生徒数 302 人

教員数 25 人

学級数 12 学級 (うち特別支援学級 3)

「教科リーダー」の生徒が授業の司会進行役を務める

横須賀市立長沢中学校は、生徒が主体となり、一人ひとりの課題意識に基づいて学びを進める授業づくりを通して、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の充実を図っている。

同校は2019～22年度の4年間、横須賀市「フロンティア研究校」の指定を受け、「生徒が主体的・対話的で深い学びに取り組む授業づくり」をテーマに実践研究を行ってきた。研究推進委員長を務める貝塚啓悟先生は、当時を次のように振り返る。

「授業に集中できない生徒が散見される状況を変えようと、当時の校長の『授業は最大の生徒指導である』という信念の下、生徒が自ら学びに向かう授業づくりを研究テーマとしました」

同研究では、生徒が授業で活躍できる場面を増やして主体性を引き出すことを重視。その仕組みの1つが、教科ごとに各学級の生徒2人が務める「教科リーダー」（任期は半年間）の設置だ。教科リーダーが授業を司

会進行し、教員はその様子を見ながら軌道修正をしたり、個別に学ぶ場面で生徒を支援したりする。

「教科リーダーを設置した最大の目的は、生徒自身が『学び方』を考えられるようになることです。教科リーダーを中心にクラス全員が学びに参加することで、『この場面で話し合いを入れよう』『もう少し個別に考える時間を取ろう』などと、自ら調整しながら学ぶ集団づくりを進めています」

当初は教員が授業の台本を作成して教科リーダーに渡していたが、次第に生徒は授業の進行に慣れていった。そこで2年目からは、教科リーダーが考えて授業を司会する場面を増やした。現在は、全教科共通のフォーマット「長沢スタンダード（スマートレッスン）支援案」（以下、長沢スタンダード。図1）を活用している。

長沢スタンダードでは、授業の展開の基本として「見通しを立てる」「解決活動」「まとめ」「振り返り」を設定。教科リーダーは学習内容に合わせてそれぞれの活動内容を考える。例えば、「解決活動」では「協働的な学び」



研究推進委員長

貝塚啓悟

かいづか・けいご

同校に赴任して7年目。
国語科。1・3年生担当。

を行うと決め、「ペア学習」「班学習」「ワールドカフェ」「取材タイム」から適切な活動を選ぶ。自分で考えた活動を行うことも可能だ。

さらに、ほかの生徒と考えを共有する、1人で調べ学習をするなど、自由に活動できる「ぶらぶらタイム」を、全教科の授業に取り入れている。

「以前は『5分間、1人で考えよう』と指示をすると、思考が止まってしまう生徒がいました。それなら、分からないことを誰かに質問するなど、各自が状況に合わせて行動できる環境にしようと、ぶらぶらタイムを設けました」（貝塚先生）

ぶらぶらタイムで移動した場所にそのままどまり、その後の授業を受け続けることも可能だ。生徒が自分の学びやすい環境を見つけられることを重視している。

図1 「長沢スタンダード(スマートレッスン)支援案」1年生 国語 単元「竜」5時間目(例)

教科	国語	単元名	「竜」文学的文章の魅力を探そう	9月12日(火) 6時間目	1年	1組	
本時の目標(つきたい力)		物語における表現の効果について考えを深めている			授業者: 貝塚 啓悟		
<div style="border: 1px solid red; padding: 5px; width: 100px; height: 100px; display: flex; align-items: center; justify-content: center; margin: 10px auto;"> ま </div>		<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: 150px; height: 100px; display: flex; align-items: center; justify-content: center; margin: 10px auto;"> 問 や面白い表現は作品中の出来事 根拠を明確に表現は？ </div>			<div style="border: 1px solid red; padding: 5px; width: 50px; height: 100px; display: flex; align-items: center; justify-content: center; margin: 10px auto;"> 見 オノマトペ・表現のエ </div>		<div style="border: 1px solid blue; padding: 5px; width: 20px; height: 100px; display: flex; align-items: center; justify-content: center; margin: 10px auto;"> 課 竜 今江 祥智 </div>
展開(分)	見通しを立てる		解決活動		まとめ	振り返り	
[順番]	問題の提示	課題設定と問の共有	自力解決	協働的な学び	価値の共有	振り返り	
該当するものに時間を記入	[1]前時の振り返り(2) []キーワード集計() []問題・資料を見て気づき発表	[2]課題の確認(3) []本時の流れ() [3]キーワードの把握(1) [4]補足説明(3) []見通しの共有() []グーバーチェック()	[5]一人で課題解決(5) []追加ヒント()	[]ペア学習() [7]班学習(5) []ワールドカフェ() [6]取材タイム(5)	[]全体考察() [8]個人でまとめる(20) []班でまとめる() []代表班発表() []口頭発表() []キーワード集約() []教科リーダーがまとめる()	[8]振り返りを書く(5) []練習問題を解く() []その他	
準備する物	教師 生徒		教科書・ファイル・chromebook				

「長沢スタンダード(スマートレッスン)支援案」は、教科リーダーが授業の進行を考えやすいよう、授業展開をフォーマット化したもので、授業ごとに作成する。授業の展開を「見通しを立てる」「解決活動」「まとめ」「振り返り」とし、それぞれの活動を例示。教科リーダーは、活動を選ぶか、自分で活動を考えるか、その順番と配分時間を記入する。

教科リーダーが、授業の活動内容を決め、その順番と時間を記入する

※長沢中学校の提供資料をそのまま掲載。

学びに対する自覚が「個別最適な学び」につながる

教科リーダーが授業を主導し、生徒が教室を自由に動いて学び進めることが授業の基本になると、教員の発話量は大幅に減った。

「教員によって多少異なりますが、私の場合、1回の授業で5分間以上話すことはほとんどありません。以前は『〇〇をください』『静かにして』といった指示をよくしていましたが、今は『なぜ』『どうして』『どのように』などと、生徒の思考を引き出す声かけがほとんどです」(貝塚先生)

授業の方針が大きく変わり、生徒の学びに向かう姿が大きく変化した。

「教科リーダーは『どうすれば学びが深まるか』と知恵を絞る中で、どんどん主体的になっていきました。それに影響されて、周りの生徒も大きく変化しました。授業の進行に協力的になり、『ここが分からない』『もう少し考えたい』といった学びを深め

るための提案を教科リーダーにするなど、学習に前向きになりました」

教員に答えを聞こうとする生徒はほとんどおらず、生徒同士で質問や助言をし合うなど、自分たちで解決しようとする姿が見られる。生徒が受け身の学習姿勢から脱して、自分は何を学ぶのかを自覚して取り組んでいることは、「個別最適な学び」につながっていると捉えている。

教科の特性を意識し、活動を個別→協働の順に

2022年度の研究校指定終了後も、同校は研究を継続している。2023年度は、それまでの実践を基に、各教科の特性を生かした授業づくりに注力。貝塚先生は担当教科である国語科の特性を考え、今まで以上に「個別最適な学び」を意識するようになった。

「国語科は、生徒それぞれの素材文に対する考えの『ズレ』を楽しみながら学びを深める教科と捉えていま

す。そこで、生徒が個別に考える時間を十分に確保した上で『協働的な学び』を行う授業展開にしています。「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に進める、貝塚先生の国語の授業を見ていく。

1年生の国語科の単元「竜」では、全6時間の授業を通して、表現の工夫に着目しながら学ぶことで、文章の魅力に気づき、それを日常生活に生かせるようになることを目指した。

『竜』は、擬音語や擬態語といったオノマトペや、生徒があまり触れたことのない凝った表現が多く見られ、それが物語を面白くしています。そこで、自分が気になった表現に着目して、作品の魅力を明確な根拠とともに語れるようになることを、単元の目標にしました」(貝塚先生)

単元の1時間目の授業では、身につけたい力や問い、評価規準を記した単元計画(P.15図2)を生徒に渡し、生徒が単元の見通しを持って学べるようにした。

図2 1年生 国語 単元「竜」の単元計画 生徒が設定した課題の記入例

教員が設定した問い		クラスの課題		個別の課題	
6	① 同国語書にある漢字語・擬態語について、 「つけない力」を説明しよう。	① 初読の感想 ・意味調べ ・「竜」の魅力を調べる	① 場面について 「場面」に「たぐい」をついてみる	① 場面について 「場面」に「たぐい」をついてみる	① 初読の感想 ・意味調べ ・「竜」の魅力を調べる
5	② 「つけない力」を説明しよう。 ③ 「つけない力」を説明しよう。 ④ 「つけない力」を説明しよう。	② 「つけない力」を説明しよう。 ③ 「つけない力」を説明しよう。 ④ 「つけない力」を説明しよう。	② 「つけない力」を説明しよう。 ③ 「つけない力」を説明しよう。 ④ 「つけない力」を説明しよう。	② 「つけない力」を説明しよう。 ③ 「つけない力」を説明しよう。 ④ 「つけない力」を説明しよう。	② 「つけない力」を説明しよう。 ③ 「つけない力」を説明しよう。 ④ 「つけない力」を説明しよう。

授業レポートで紹介する授業 P.16

（一）本単元で身に付きたい力
① 比較や分類、関係づけなどの情報の整理の仕方について理解を深め、それらを使うことができる力（知識・技能）
② 場面や登場人物の心情の変化などについて、根拠をもとに捉えることができる力（思考・判断・表現）
③ 文章の構成や展開、表現の効果について、根拠を明確にして考えることができる力（思考・判断・表現）
④ 言葉がもつ価値に気づくと共に、進んで読書をし、我が国の言語文化を大切に、思いや考えを伝えあおうとする（主体的）

（二）評価規程
・事象や行為、心情を表す語句の意味を増やすこと、その語句の具体的な意味と文脈上の意味との関係に注意して、文章を読み取ることを通じて、読書を通して読書態度を身に付けていく。
・「読むこと」において、場面や登場人物の心情の変化などについて、描写をもとに捉えている。
・「読むこと」において、文章の構成や展開、表現の効果について、根拠を明確にして考えている。
・進んで心情的変化などを捉え、学習態度によって考えを伝えあおうとしている。

単元計画には、「本単元で身に付きたい力」、3つの観点別の「評価規程」、「単元計画」を記載している。各授業の「学習内容」には、その授業で「つけない力」も明記。そして、教員が設定した各授業の「問い」を基に、教科リーダーが考えた「クラスの課題」と、それらを基に、生徒が個々に考えた「個別の課題」を記入しようになっている。

※長沢中学校の提供資料をそのまま掲載。

各自が意識して学ぶことを「個別の課題」に設定

貝塚先生の授業では、「個別最適な学び」のきっかけとして、授業ごとに「クラスの課題」と生徒の「個別の課題」を設定させている。その方法は、まず貝塚先生が「問い」を示し、教科リーダーはそれを基に授業で取り組む課題をクラスの課題として設定する。そして、クラスの課題の達成に向け、各自が意識して学ぶことを個別の課題に設定するという流れだ。

「個別の課題を設定することで、生徒は漫然と授業を受けるのではなく、『自分はこの時間に何を学びたいのか』『どのような課題に取り組むのか』などと考えながら学んでいきます。例えば、部活動で、試合に勝つという目標に向けて、部員がそれぞれ異なるトレーニングに励み、得意を伸ばしたり苦手を克服したりしていくというイメージです」（貝塚先生）

同単元の5時間目（授業レポート）

は、貝塚先生が「根拠を明確に（した上で）作品中の出来事や面白い表現は（何だろう？）という問いを設定。それを踏まえて、教科リーダーはクラスの課題を「（自分が気に入った）表現を探し、理由を書こう」とした。それを受けて、生徒は「表現の効果を考えよう」「面白い理由は？」などと個別の課題を設定した（図2の囲み部分）。

個別の課題の質には生徒によって差があり、「ワークシートをきれいに書く」など、クラスの課題からは離れたものもある。そうした場合でも、自分で設定した課題であることを尊重し、貝塚先生は指導したりはしない。

授業の前半は、教科リーダーが「自力解決」の活動としたため、各自が面白いと思った文章中の表現について、その理由や効果を生徒が各自で考えた。その後ぶらぶらタイムに移行すると、「教科書を読み返したり、『国語便覧』で調べたりする」「『竜』の作者のほかの作品を調べる」「インターネットで調べる」「1人でじっくり

りと考えを深める」「友人と意見交換をする」「授業支援ツールを活用して、ほかの生徒の考えを知る」など、生徒は様々な方法を選んで学んだ。

「自力解決で考えたことを深めるために、どういった学び方を選択するべきかを一人ひとりが考えて動ける場を用意して、『個別最適な学び』につなげています」（貝塚先生）

生徒が興味を持った表現は、「いそいそ」「ねちねち」「じいっと」「息を殺す」「とぐろを巻く」など、多様であり、面白いと思った理由を言葉で伝え合うことにより、自分が気づかなかった作品の魅力を理解していく姿が見られた。

知識・技能の習得でも「個別最適な学び」を強化

生徒が自分の得意な形で表現できるよう、学習ツールの選択も自由だ。例えば、単元を貫く問いの答えをまとめる活動では、タブレット端末で

授業レポート

1年生 国語 単元「竜」5時間目

本時の問い 根拠を明確に(した上で)作品中の出来事や面白い表現は(何だろう)?

1 本時の問いを確認

5分間



書籍を資料として使えるよう、授業は図書室で行った。最初に、教科リーダーの生徒が本時の問いと「クラスの課題」を板書し、本時の見通しを持った。

2 個別の課題を共有

8分間



各自が「個別の課題」を設定し、グループ内で共有。前時に取り組んだワークシートを見せ合い、面白く感じたオノマトペや表現について意見を交換した。

3 ぶらぶらタイム 前半

10分間



「ぶらぶらタイム」で各自の課題に取り組んだ。前半は、多くの生徒が図書室の書籍やインターネットで作者や作品の情報を探すなど、各自で学んだ。

4 ぶらぶらタイム 後半

10分間



「ぶらぶらタイム」の後半には、生徒が数人ずつ集まり、自分とは異なるオノマトペや表現に着目した生徒に理由を尋ねるなど、意見を交換した。

5 考えの再構築と発表

7分間



生徒は「ぶらぶらタイム」での学びを踏まえて自分の考えを再構築し、ワークシートに記入。数人の生徒が自分の考えを発表し、クラス全体で共有した。

6 振り返りの記入

5分間



生徒はワークシートに本時の振り返りを記入。「筆者がなぜその表現をしたのかを想像して、自分で考えられた」など、自分ができたことを書いていた。

スライドを作成する生徒もいれば、ノートに手書きをする生徒もいる。

「『竜』の魅力をもとめるという目標は一緒ですが、その過程で生徒は自由に学び方やツールを選んで学びます。だからこそ、生徒間の意見のズレが大きくなり、『協働的な学び』が深まると考えています」(貝塚先生)

生徒の多くは、単元を通してオノマトペなどの表現の工夫が作品の魅力を高めていることを理解している様子だった。そこで、作品の面白さをさらに見いだせるように、本単元

で学習したオノマトペなどの視点で、夏季休業中に読んだ本の魅力をまとめ、グループで伝え合う「ブックトーク」を、今後の授業で行う計画だ。

貝塚先生は引き続き、生徒が自分で学びをつくり上げる授業を通して、生徒の主体性を引き出しながら、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の充実を図っていく。そして、知識・技能の習得においても、デジタルドリルなどを活用して「個別最適な学び」に力を入れたいと考えている。

「生徒主導の授業による知識・技能

の習得の強化は、今後の課題の1つです。そこで、単元計画に基づいて生徒が自分のペースで知識・技能の習得に取り組めるような仕組みを検討し、授業では『協働的な学び』で学びを深めるというサイクルを確立したいと考えています」(貝塚先生)

Web VIEWnext ONLINE

授業改善が学校での活動全体へ好影響を与えた様子を、ウェブ記事で紹介。右の2次元コードからアクセスできます。

